

海洋民族としての北ヨーロッパ諸国の域際性

日本大学国際関係学部 名誉教授
石渡 利康

【講演要旨】

1. 北欧諸国民の海洋民族性

北ヨーロッパの北欧諸国とは、5 つの国、スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、アイスランド、フィンランドと、3 つの内政自治地域、グリーンランド、フェロー諸島、オーランド諸島から成る。グリーンランド、フェロー諸島はデンマークの自治領であり、オーランド諸島はフィンランドの自治領となっている。内政自治地域のそれぞれの特徴として、グリーンランドにはイヌイット民族が居住し、フェロー諸島の「フェロー」とは「羊」を意味し、羊の放牧がおこなわれている。オーランド諸島では、1800 年代の終わりに、ロシアによるフィンランドのロシア化政策が推し進められ、フィンランドの自治が剥奪された。その頃、日本人の明石元二郎大佐がフィンランドのロシアへの反発を強めるために、フィンランドのレジスタンス運動を支援しており、歴史的にフィンランドと日本の関わりは深い。明石がレジスタンス支援で送った武器がオーランド諸島からさほど遠くないところで座礁したこともある。スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、アイスランドは、北方ゲルマン系民族で言語も近いが、フィンランドは、民族も言語も他の 3 国とは異なっている。

これら北欧諸国は、8~11 世紀にバイキング遠征をおこなっていた。それぞれの遠征先は異なっており、スウェーデンは、川を南下し黒海方面へ、デンマークはヨーロッパの海岸沿いに南下し、フランスのノルマンディーに居住し、地中海へ入り、最終的にシチリア島にノルマン王国を建設した。ノルウェーは、最も豪快で、荒波を西へ進み、アイスランド、更にアメリカ大陸を発見した。コロンブスがアメリカ大陸を発見したのは嘘であり、ノルウェーはアメリカ大陸のヴィン（=ワイン）ランドに最初に到着したのが事実である。

シチリア島は、11 世紀にノルマン人の侵入を受け、ノルマン王国が建設されたが、紀元前 8 世紀頃からギリシャ人が上陸し、植民地化された。シチリア島で発見された「トリナクリア（=三角形の島）」と呼ばれる硬貨には、ギリシャ神話に登場するゴルゴン 3 姉妹の 1 人であり、見たものを石に変える能力を持っていたメドゥーサと 3 本足が描かれている。一方で、イギリスとアイルランドの間のアイルランド海にあるマン島では、3 本足に滑車がついた絵が描かれた「トリスキール」と呼ばれる硬貨が発見された。3 本足が描かれていることで、シチリア島で発見されたトリナクリアと共通点があるが、これは、シチリア島に上陸したバイキングが硬貨「トリナクリア」を、バイキングが占領していたマン島に持って行ったため

と考えられている。その後、バイキングはアイルランド、イングランドにも上陸した。イギリスで実施されている中央課税制度、陪審員制度はバイキングが残したと言われている。これら諸制度がイギリスからアメリカ・日本へと広まった。これらのことから北方民族の域際関係として日本ともつながっている。

では、何故バイキングは南へ移動したのか。理由の一つとして、自由の民であり自立性が高いことから1人の国王に仕えるのを拒絶したこと、寒冷の北ヨーロッパは経済的にも後進国であったこと、太陽＝南に対する憧れが強かったこと等があげられる。

バイキングの精神は現在でも生きている。ノルウェーの海洋生物学者・人類学者であるトール・ヘイエルダールは、北欧5カ国のキリスト教への改宗が1000年頃で、大変遅れたと述べている。キリスト教が普及するまで、北欧諸国では北欧神話が信じられていた。北欧神話とは、多神教であり、その中の1人オーディンは情報化の神と言われているが、トール・ヘイエルダールは、オーディンが神ではなく、実在した人間である実在説を主張した。カスピ海の西南岸に位置する西アジアの一地方にアゼルバイジャンという国にオーディン族がかつて存在し、オーディン族はローマの拡張により徐々に追い立てられ、ドイツ、ついにはデンマークの島オーゼンセに住み着いた。オーゼンセはアンデルセンの生誕地であるが、「オーディンの住む島」という意味がある。つまり神話の人物は、実在した人物を神格化したものであり、これをエウヘメリズムという。オーディン実在説は、「アイスランド・サガ」と呼ばれる北欧文学を根拠としている。

2. 北欧圏協力

北欧諸国のうち、フィンランド、デンマーク、スウェーデンはEU加盟国であるが、アイスランド、ノルウェーは未加入である。一方で、北欧諸国は、北欧共同体を組織し、1952年には、各国国会議員の協力機関である北欧審議会を発足させた。その後、北欧閣僚審議会を発足し、閣僚間の協力を開始し、北欧諸国間でできるだけ似た政策を実施するように努められている。

1993年には、北欧審議会が主催した北極航路に関する北極圏諸国国際会議が開催された。本会議には、北欧5カ国、ロシア、カナダ、アメリカが参加し、日本の国会議員も積極的に招聘されたにもかかわらず不参加であり、日本は学术界から石渡のみの参加となった。このように、日本は、北極海政策に対し後進国となった。

3. 日本人との共通性

フィンランドの家屋は、ドアを外側に開くようになっており、外から攻められやすい一方で、逆にオープン性を持っているとも言え、日本の家屋も共通している。他に海洋国家の共通性としては、海や港に関する歌を好む共通点がみられる。

4. ユラン法

北欧諸国に見習うべき点として、ユラン法があげられる。ユラン法前文には、「法によって、国はうちたてられなければならない」と書かれており、本法がバイキング時代に、後進国であった北欧諸国に既に存在していたことが驚嘆すべき点である。本法には、法治主義の原則が規定されている。例えば、法は万民の利益のために存在すること、人権に対する配慮がなされていること、具体的には、外国人、巡礼者、貧しき人々を始めとする社会的弱者の保護等が定められている。前文の最後には、キリスト教の影響を受けて、法を遵守しない者は、裁きの日にその償いをさせられると述べられている。

また、ユラン法は、前文の法治主義に加え、道治思想にも基づいている。これは、日本語で言うところの「道理」あるいは「モノの道理」に極めて類似する思想である。つまりユラン法は、法治主義と道治思想を含んだ地方法である。

5. 質疑応答

質問：北欧諸国の結束性が外交政策、特に北極海航路政策に反映されている部分はどこか？

回答：北欧諸国は、北極海を人類共有財産と考えている。ロシアは深海調査結果により、北極海のロモノソフ海嶺がロシアの大陸棚の延長上にあるとして領有権を主張しているが、本行為に対する北欧諸国の反発は大きい。また、イギリスは、スヴァールバル諸島のスピッツベルゲン島の領有権を主張し、ノルウェーとの間に領有権をめぐる争いが起こったが、最終的にはスピッツベルゲンに関する条約が1920年に締結され、スヴァールバル諸島をノルウェーの統治下におくとする他、全ての加盟国は等しくこの島で経済活動を行う権利を有するとされ、非武装地帯とすることが定められた。これは、北極海を共通の財産、共通の利用に供する北欧諸国の考えに基づいている。

質問：域際性と国際性の違いは何か？

回答：歴史的にヨーロッパはラテン語とキリスト教によってもともと一つであり、Inter-regional、つまり国際関係ではなく、域際関係であったといえる。

質問：日本は、北極海政策に対しでおくれ気味とも言えるが、今後どのように北欧諸国とつきあっていけばいいのか？

回答：決して遅くはない。北極海政策や北極海研究は始まったばかりである。人間関係を積み重ねることが重要である。

以上